

中国四川省・西華大学日本語教育事情

劉 玉 茹

要旨

現在、ユネスコは、異なる文化の理解と世界平和のための言語学習を提唱している。グローバル化する世界情勢の下、学習者の多様化したニーズを考慮しつつ、コミュニケーション能力の養成が注目されるようになってきた。西華大学の日本語教育の教育理念、教授法などもこのような言語教育に呼応していく必要がある。このため、筆者は西華大学の日本語教育についてのカリキュラム、教科書、日本語能力試験、課外活動について調査し、日本語教育の改善を目指し、現状における問題点の分析、今後の課題についての検討を行なった。

キーワード

中国西華大学 日本語教育 コミュニケーション運用能力 学習者のニーズ

はじめに

社会の世界化が進むにつれて、国境を越え、日本語教育も異なる文化の理解と世界平和のための言語学習への転換を迫られている。よって、国際交流の促進につながる日本語教育にとって、学習者のニーズの多様化を考慮しつつ、文化理解、コミュニケーション能力の養成が特に注目されるようになっている。西華大学でも従来の言語教育理論と言語教授法では、コミュニケーション能力養成など学習者のニーズに応えられなくなっている。現カリキュラムの改訂、副教材開発、・ストラテジーの応用、文化指導など効果的かつ特色ある指導方法などの課題に直面している。本稿では西華大学の日本語教育改善のため、カリキュラム、使用教科書、日本語能力試験、課外活動などについて調査し、今後の課題について検討を行った。

1 西華大学の変革

西華大学（以下西華大）は中国四川省成都市にあり、前身は1960年に創立された四川工業学院であった。2003年に成都師範専門学校（1971年創立）と統合し、四川省政府所属四年制総合大学となった。40年に渡る歴史の中で、工学、理学、経済、文学、教育などの17学部、59の専門教育コースが設置されてきた。西華大の理念である「求是・明德・卓越」を踏まえ、「科学精神」と「人文精神」の観点から人材養成、研究に取り組み、創造的人材育成を目指している。14ヶ国20大学と学術交流協定を締結しており、また、アメリカの6州立大学とは「1-2-1」⁽¹⁾というツィンングプログラムを締結し、学生の教育の充実を図っている。

現在教職員数は約1,500名で、そのうち、教授、助教授は500名程度である。中国全土から学生募集を行っており、学生数は約2万

人である。外国人留学生受け入れ資格を有しているが、現在留学生の受け入れは行われていない。

四川工業学院が創立された当時、外国語はロシア語のみであった。その後中国の経済発展につれ、英語と日本語が導入された。当時、外国語教師は社会科学学科に属していた。1987年、外国語学部が設置され、3年制の英語学科が始まった。2001年、4年制となり、2003年、英語修士課程と日本語学科が設置され、英語専攻の大学院生と日本語専攻の学生を募集し始めた。

外国語学部は外国の言語、文化、社会について教育、研究し、高い言語能力を有する人材を養成することを目的とする。現在、英語、日本語、ロシア語の3言語があり、教職員数は109名である。英語専攻、英語専攻大学院、日本語専攻がある。4年制専攻に加えて、3年制の英語教育専攻も継続されている。現在、学生数は1,300名で、そのうち、英語専攻820名(大学院生40名)、日本語専攻230名、3年制英語専攻270名が在籍している。

2 日本語学科設立

西華大では1980年代から第一外国語としての日本語教育を始めた。2001年、中国がWTOに加入以降、中日間において、経済、文化、貿易、科学技術などの多分野にわたる交流が拡大し、トヨタ、イトーヨーカ堂をはじめとする160の日系企業が四川省に合弁会社及び事務所を設立している。中国の内陸部において、四川省は日本と経済交流が最も盛んな省となりつつある。このような経済情勢の変化に伴い、高い言語能力を備えた人材のニーズが高まりつつあるが、このような社会のニーズに呼応し、2003年には、日本語学科が設置され、毎年60名の学生募集を行い、専攻としての日本語教育が行われるようになった。

日本語学科の教育目標は、日本語能力養成

および高い言語運用能力を有し、日本文化、社会を理解する人材を育成することである。現在、日本語教師11名(日本人教師1名)が指導に当たっている。日本語教師は、日本語専攻以外の日本語すなわち学部生の第一外国語、英語専攻向の第二外国語としての日本語教育も担当している。現在、第一、第二外国語の日本語履修者数は、毎年約300名いる。しかし、2007年9月以降、教師と学生数の割合および大学の教育重点などが配慮され、3年制専攻募集は取りやめ、英語専攻募集定員数も毎年135名(専攻120名、大学院生15名)に削減することが決まっている。その結果日本語の学習者も減少することになる。

学生のレベルも年々上がってきている。日本語を専攻する学生は国家統一試験に合格し、なおかつ英語も大学が設定するレベルに到達しなければならないという卒業要件があるが、日本語科設置当初は、英語レベルは英語専攻の学生よりやや低い程度であった。しかし、近年、社会における日本語人材需要が高まるに連れ、2005年以後、英語専攻の学生とほぼ同レベルの学生が入学するようになってきている。

3 日本語教育の現状

中国の大学の学事暦は、毎年9月から7月である。2年生以上は9月初旬、新入生は中旬から授業を開始する。7月末から8月末までが夏休み、1月末から2月末までが冬休みである。

西華大では、上(前期)、下(後期)の2学期制で、一学期の授業時間は16週間である。1日11時限(朝4時限、午後4時限、夜間3時限)行う。学生数の増加に伴い教室数が不足しているため夜間も授業を行っている。今学期、筆者の「精読」授業(表1)4コマ全てが夜間だが、次学期には夜間には開講しない。授業は2コマ(1コマ45分)行うが、5

分間の休憩を挟む。外国語学院の専攻学生の授業はマルチメディア教室で行っている。外国語学院の建物にはマルチメディア教室が18

教室あり、ひとつの教室には60～100席ある。1クラスあたりの受講者数は30名～60名である。

表1 時間割一例（筆者担当科目）

	時間	月曜	火曜	水曜	木曜	金曜
午前	8：00－8：45	文法				
	8：55－9：40					
	10：00－10：45	精読		精読		精読
	10：55－11：40					
午後	14：00－14：45					
	14：55－15：40					
	16：00－16：45					
	16：55－17：40					
夜	19：00－19：45		精読		精読	
	19：55－20：40					
	20：50－21：35					

注：夜間時限は3時限から2時限で、科目によって異なる。

3-1 日本語専攻教育カリキュラム（資料表2）

専門日本語教育は基礎（1・2学年）と上級（3・4学年）の2段階に分かれ、「聞く・話す・読む・書く」の四技能養成と「翻訳・通訳」の専門日本語教育が主な指導内容となっている。そのうち、「精読」は入門からの基幹科目にあたり、教科書は、「新編日本語」を使用している。これは「専攻日本語教学大綱」（以下「大綱」）に従って編纂された教科書で、日本語力の養成、向上を図る目的で、1年生から4年生までの4年間で、全8巻を終了する。「大綱」とは中国国家教育委員会に設けられた日本語教育指導委員会によって作成された日本語指導要領のことである。

1学年60名の学生は2クラスに分かれ授業を行っている。1・2学年の「精読」は語彙、文法、内容、読解から成り、語彙、文法は中国語で説明する。8コマごとに1課ずつ進み、語彙、文法、内容の説明、練習問題、読解を

行い、基礎的な言語力を養う。「精読」で学んだ語彙、文法などを反復練習できるように、「読解」「会話」「閲読」が基礎科目としてある。学生が自然な日本語で考え、話せるようにするため、「会話」の授業は日本人教師が担当し、中国語版「みんなの日本語（Ⅰ・Ⅱ）」（スリーエーネットワーク、中国外語教研出版社）を使用している。日本語関連科目以外では、学生は1、2年の3学期間、第二外国語として英語を勉強する。

3・4学年の「精読」は、日本の文化、政治、経済、思想などが盛り込まれた小説、エッセー、記事、科学分野の文章などを教材として、さらに日本語力の向上を図る。「精読」「会話」も継続され、高度な聴解に加え日本近代文化鑑賞などの専攻型の科目や翻訳・通訳などの実用訓練型の科目がある。また、卒業後、学生が日系企業で働くことを想定し、日本のビジネスに適應できるように「国際貿易実務」「ビジネス日本語」「日本企業文化」も設置されている。しかし現在、教員不足のため、国

際貿易実務」は経済学部が担当している。

筆者は1987年～1991年貴州大学で日本語を専攻したが、その当時は「ビジネス日本語」など経済・貿易に関わるコースは設置されておらず、近年加えられてきた新たな科目である。

3-2 外国語としての日本語教育(資料表3)

西華大では、学部生は、英語、日本語、ロシア語の外国語の中から一つを選択し、第一外国語として2年間勉強する。英語を選択する学生数に比べ、ロシア語と日本語を選択する学生数は少ない。ロシア語を選択する学生は、中学校から勉強しており、毎年5名～10名程度いる。日本語を選択する学生は英語を苦手とする学生が多いが、日本語であれば初修外国語として学びやすいというのがその選択理由であることがほとんどである。漢字は中国人にとって馴染みがあり、学習のプレッシャーがそれほど大きくないことも理由としてある。現在中国の大学では外国語が必須科目であるが、英語を選択した場合、大学英语4級の試験に合格しなければ卒業できないという中国政府の方針がある。それに対して日本語を履修する場合、大学内で実施する毎学期の日本語試験に合格すれば、卒業できるというのが学生にとっての最大の利点である。

英語専攻の学生は第二外国語を履修する必要がある。中日交流も盛んになりつつあると伴に、英語ばかりではなく、日本語で簡単なコミュニケーションもできる人材を求める企業が出てきたため、4年制英語専攻の学生の大半は、日本語を第二外国語として選択する。また、英語専攻の大学院生も、第二外国語として日本語を1年間学ぶ。

第一、第二外国語の日本語教育では、基礎日本語力を養成することを目的に、「中日交流標準日本語」を使用している。4コマ毎に

1課ずつ進み、語彙、文法、内容の説明、聴解、練習問題を行う。学部生と英語専攻4年制学生は、2年間で初級上・下2冊を、大学院生は1年間で中級上・下2冊を終了する。

「中日交流標準日本語」は、中国全域で一般的に使用されている教科書で、現在、改訂版が出版され、会話が盛り込まれているが、西華大では、未だ旧版を使用している。

現在、マルチメディア教室が不足しているため、外国語としての日本語教育は普通教室で行われている。1クラス当たりの学生数は、約50～70名である。

3-3 日本語能力試験

現在、中国国内で実施されている主な日本語試験は3種類(表4)ある。中国国内の日本語試験2種類と日本の試験である。日本の試験は、世界規模で実施されている日本国際交流基金主催日本語能力試験(以下日能試)で、中国国内の試験は在学日本語専攻対象のための日本語専攻4級と8級試験(大学外国語教育指導委員会主催)、学部生対象のための大学日本語4級試験(同指導委員会主催)である。日能試は、毎年8月に申し込みを行い、12月に試験を受ける。四川省では、四川大学と四川外国語大学(重慶市)の2ヶ所で実施されている。

日本語専攻4級と8級は、それぞれ2002年と2003年に始まった。4級の目的は、1・2学年で学習した基礎知識と基本技能が「大綱」に示された基礎段階に達成しているかどうか、また8級は、4年間の学習を通して、総合的な言語技能とコミュニケーション能力が「大綱」の上級段階に達成しているかどうかをテストするものである。専攻学生は2年生の下学期に4級を、4年生の上学期に8級を受験する。4級のレベルは、日能試2級とほぼ同じ程度で、8級は日能試1級より高いと評価されている。4級、8級受験は2回のみという決まりがあるので、2回の試験に不

合格となると、受験資格がなくなる。日本語学科の学生は、専攻日本語4級と全国大学生英語4級試験に合格することが卒業要件となっている。8級は卒業要件とはなっていないが、専攻の学生のほとんどが受験する。現在2級以上の日本語能力は日本系企業に就職する場合の最低条件となっており、学生全員、日能試1級の合格を目指している。

大学日本語4級試験は1993年に始まった。

非日本語専攻の学生は、2年生の下学期に受験する。レベルは日能試2級と同程度である。しかし、「大学日本語」(高等教育出版社)という教材をもとにして試験問題が作成されている上、作文も含まれているため、「中日交流標準日本語」で学んでいる学生にとっては、この試験は難し過ぎ、受験者は少なく、毎年約40名の学生が受験しているのみである。

表4 日本語試験

日本語専攻8級			日本語専攻4級			大学日本語4級		
毎年12月に西華大学で実施			毎年6月に西華大学で実施			毎年6月に西華大学で実施		
試験構成	点数(点)	試験時間(分)	試験構成	点数(点)	試験時間(分)	試験構成	点数(点)	試験時間(分)
聴解	30	20	聴解	20	30	聴解	20	20
文字	10	100	文字	10	70	文字・語彙	15	70
語彙	25		語彙	15		文法	10	
文法	20		文法	25		読解	40	
文学	19		読解	15		作文	15	30
読解	12	句を作る	10	60				
翻訳	40	120	作文	15				
作文	40							
合計	200	240		110	160		100	120

3-4 課外活動

西華大の日本語専攻学生が日本語に興味を持ち、学習意欲を高めると同時に日本文化への理解を深めるために定期的に以下のような課外活動を実施している。

・文化祭

毎学期、日本映画の放映、カラオケコンテスト、日本文化についてのグラフィックや写真展示、ホテルから日本料理調理師を招き、日本料理を作って日本文化を体験するなどの活動を通じて、日本文化を体験させる。

・日本語スピーチコンテスト

毎年、日本語専攻学生の中から優秀な学生を選んで、駐重慶日本大使館主催日本語スピーチコンテストに参加させている。

・「日本語コーナー」毎週二回、日本人教師、

日本語教師が学生と会話練習を行う。

・日本語集中コース 会話能力、聴解能力の養成を目指し、毎学期実施している。

3-5 学生の就職状況

2003年、日本語学科設立時入学した学生52名が第1期生として卒業した。その中3名は大学院(西安外国語学院、広州外国語大学、四川大学)に進学した。その他の学生は、就職を希望し、内定者は約85%である。成都是中国の内陸地方に当たり、日本との貿易関係は中国沿海地方と比べものにならないほど少ないので、沿海地方の就職率がずっと高い。就職先は広東省、福建省、山東省、浙江省などの日本と貿易関係にある中資あるいは合資会社に集中した。トヨタなどの日系地元企業

に入社した卒業生は5名程度にとどまった。

英語専攻の卒業生が小・中・高等学校の教師をはじめとして広い分野で活躍することができるのに対し、日本語が設置されている小・中・高等学校数が極めて少ない。一方、大学では修士・博士号の資格が必要であるため、日本語専攻の学生の就職の門戸は狭い。また、理工系などの学生と比較した場合、専門性に薄く就職にマイナスとなっている。

日本語を第一外国語とする学生も、就職先では英語のニーズが高く、日本語を勉強しても役立たないと考える学生もいる。このような就職状況は、今後の日本語教育に影響していくのではないかと考える。

4 日本語教員

90年代前の中国においては、日本語分野での大学院設置は極めて少なかった。しかし、90年代後半以降、大学院が増加しつつある。現在、西華大学では、10名の中国人教師のうち修士号取得者は4名で、35歳以上は1名のみである。研究分野は日本語教育(1名・早稲田大学大学院)、日本語学(2名・四川大学)と翻訳(1名・四川大学)である。博士号取得者はいない。教員の職称、年齢層分布と学位取得の具体的状況は以下の表5・6に示した。

日本語教員は大学の日本語学科で養成されているが、大学の採用試験に合格しなければならない。2005年以降、修士号以上取得者が必須条件の1つとして定着してきている。採用後、毎年8月～9月、四川省では新任教員対象の教員研修を実施し、教育法、教育心理学、教学法などの試験に合格した後、教師の資格を持つことができることになっている。西華大では、青年教師を育成し、教育の質の向上を図るために、新任教員は最初の一年間、先輩教師の指導の下に、研修を受けながら授業をするという「青年教師指導制度」を実施

している。

日本語科主任のコーディネートの下、日本語教員10名中、教員6名は1年生から4年生までの「精読」という授業を担当し、専門授業は教員の研究分野によって決められる。筆者は今学期1年生の「精読」と2年生の「文法」の授業を担当している。「精読」は、週10コマ(7.5時間)で、「文法」は、週2コマ(1.5時間)の合計12コマ(9時間)を担当している。

英語教員は、毎年アメリカ、イギリスなどの国への派遣制度を実施し、教員研修を行っているが、日本語教師は12時間程度の授業を担当しており、研修に出かける時間的な余裕がなく、教員研修は実施されていない。西華大の中日間の研修制度は未だ始まったばかりで、国内外での日本語研修を受けることは難しく、自己研修が一般的となっている。前述したように学生募集定員数の削減や学制の改定に伴い、日本語履修学生数の減少により日本語教師の負担が軽減されることが見込まれ、今後日本語教師が研修の機会を得ることも可能であると予測される。また、現在、若い教員は修士、博士号の資格取得に積極的に取り組んでいる。

5 課題

言語教育の焦点は教師から学習者へと移っており、言語学習はコミュニケーション能力の養成を目指している。言語教育のこのような変化は日本語教育にも大きく影響を与えてきた。従来の言語教育理論、言語教授法では、コミュニケーション能力の養成など学習者のニーズに応えられなくなってきている。コミュニケーション能力の養成、文化理解に焦点をおいた教材開発、指導法を学ぶことのできる教員研修が必要である。

表5 日本語専攻教員数・職称・年齢層分布(名)

	29歳以下	30-39歳	40-49歳	50-59歳	合計
教授	0	0	0	0	0
助教授	0	0	1	1	2
講師	3	3	1	0	7
助手	1	0	0	0	1
日本人教師	0	1	0	0	1
合計					11

表6 各種学位取得者数(名)

	29歳以下	30-39歳	40-49歳	50-59歳	合計
博士	0	0	0	0	0
修士	3	0	1	0	4
学士	1	4	1	1	7

表7 教員研修参加者数(名)

国外研修	1年-3年	1	国内研修	新任教員研修
	3年以上	1		
	在日本研修中	1		

5-1 教科書における諸問題

初修・第二外国語としての日本語授業で使用している「中日交流標準日本語(旧版)」は大学2年間の時間数で消化できる内容となっており、基礎日本語力を養成する目的として中国全土で広く使用されている。また、大学院生第一、第二外国語と日能試をはじめとする多くのテストはこの教材をもとに作成されているため、西華大でも使用している。しかし、この教科書は内容的に古く、現在の日本の生活、文化、経済などが適切に反映されていないのが欠点である。また、文型、文法中心に構成されているため聴解能力や会話能力の養成を図ることは難しい。さらに、理工系、経済専門分野の内容に乏しく学生の関心が薄く、学習意欲を引き出し、知識の活性化させる指導法に結びつかない。

日本語専攻向「聴解」「会話」「閲読」の教材は、初級あるいは中級レベルの教科書しかなく、初中級レベルの教材が非常に不足して

いる。日系企業での即戦力としての人材という社会的ニーズに呼応していくためには、「ビジネス日本語」などの専門科目の教材開発が急がれる。

また、教科書の文化的要素も不足している。多くの研究者によって指摘されている。ユネスコの「持続可能な開発のための教育(ESD)」は、ユネスコは第57回国連総会(2002年)「持続可能な開発のための教育(ESD)」の発表において、「相違と多様性の尊重」「文化の多様性と異文化理解」を提唱した。このような背景の下で、日本語学習者は日本語を学ぶだけでは十分ではなく、現在の日本の社会、経済、日本人の思考、生活などにも理解を深める必要がある。しかし、授業時間数の関係で、学部生向けの日本語授業には「日本事情」は設けられていない。したがって、文法中心の学習の中で、日本文化を簡単に紹介するだけにとどまっている。これに対し、日本語専攻では日本理解を図るために「日本事

情」を設置しており、日本の政治、文化、経済、社会、地理、歴史などを紹介している。しかし、この科目の学習時間は、1学期(週2コマ)のみで、一般的な内容に少し触れる程度である。このような現状を改善するため、他の授業にも文化的要素を導入し、文化指導の工夫をしているが、教員自身の文化的知識の不足、DVDなどデジタル化した効率的な教科書や教材が不足している。

また、言語教育法に関する図書文献の不足や教育予算等の事情から生教材の不足などの問題があり、学習を困難なものにしている。

5-2 日本語指導における諸問題

授業形態

現在、西華大では60名の日本語専攻学生を2クラスに分け授業を行っているが、外国語としての日本語教育は1クラスあたり60名程度である。教師の人数と比べると、学習者の人数が多いことが問題である。したがって、教室内では教師の指導が中心となり、クラスが一齐に復誦する練習形式が一般的な指導法である。「現代の言語教育の焦点は教師から学習者へと移っている。学習者に多様な気づき、発見及び学習の楽しさを体験する機会を提供し、学習者が積極的、効果的に学習するように目指す。」という言語教育の変革に応えられない現状である。学生自らが発見し、自主的に学習・練習し、学習過程を体験していく機会は極めて少なく、グループやペアでの活動もなかなかできない。よって、学習が大幅に制限されているといわざるを得ない。また、教室外での日本語学習への支援活動がほとんどできないのもまた実情である。日本語教育の「量」と「質」のバランスを測っていくことが課題である。

学習スタイル

日本語専攻の学生は、入学後初習日本語を

学び始めるのが一般的である。中・高校時代に英語学習で形成された学習スタイルやストラテジーは日本語学習に役立つものもあるが、マイナスの影響を与えるものもある。受験体制の中国の中・高校でも試験の評価が最も重要である。学校では文法規則を学び、練習部分は全て宿題となり、学生はその文法規則を暗記するという伝統的な学習スタイルが用いられている。したがって、コミュニケーション能力の養成は重視されていない。また、どのようにすればコミュニケーション能力を養成できるのかということも理解されていない。

学習ストラテジーを適切に使うことで、言語学習能力が向上し、自律学習が促進され、同時にコミュニケーション能力を伸ばすことができると考えられている。しかし、学習者が一度身に付けた学習スタイルを「異なる別のシステムに移行するには、発想の転換、心理的な準備、形式の上での慣れなどの問題が存在する」と岡崎は指摘している。教室活動の中で、どのように新しいスタイルを形成できるのか、ストラテジーをどのように学生に獲得させていくのか、それらを総合して新しい能力の養成がどのようにすれば確実にできるか、ストラテジーはどのようにすれば学生の積極的で自発的な学習の手法となり得るのかなどの課題は今後検討していく必要があると考える。

指導法

現在西華大学の日本語教育における指導方法は伝統的な教師主導型で、文法解説、語彙説明、練習という文法能力の養成を中心に置いている。教室内では文法説明・解析から導入し、学生は教師によって説明された内容を写す。また、ドリル、会話の暗誦を通して、文型・文法の学習を促す。したがって、場面や関係性による適切さを理解し適切な非言語行動を踏まえ話すことができる社会言語能力、コミュニケーション方略能力の向上などに関

する指導は十分ではない。したがって、実際のコミュニケーションがうまく取れなくなったりすることも少なくない。今後、日本語教育の観点から、学習者の学習スタイルを伸ばし、多様な場面でのコミュニケーション能力の養成を目的としたコミュニケーション・アプローチの指導法について日本語教員は学んでいく必要があると考える。

文化指導

日本語学習者は、母語文化、中・高校で学んだ英語文化の知識を持って日本語の授業に臨んでくるが、異なる文法体系、文化習慣などの相異はさまざまなカルチャー・ショックを起こす。しかし、教員の文化的知識不足、教科書、生教材、副教材、教育方法に関する文献不足などから、日本文化指導が十分とは言えない。学習者が言語運用力の向上を図る上で、日本固有の文化とその背景、中日文化の共通性と相違について考えることによって、文化理解を促していくことが重要である。今後の文化指導に対して、「相対的文化理解を促し、他の文化に対する関心や理解を図る肯定的な態度の養成と母語文化と日本文化を対照的に扱い、自国文化の姿もはっきり認識する」(水町)という指導を行っていくことが課題である。

5-3 教員研修の必要性

日本語教師には「文化的な知識や学習者へ指導方法を初めとする実践力を身につけることのほか、現代社会の動向に目を配り、絶えず、自らの資質・能力を、より良い教師を目指して努力する」(水町)ということが求められている。教師は単に正しい知識を授けるという役目を負っているだけではなく、教師は「情報の収集者でもあり、意志の決定者でもあり、教室活動と多文化の推進者」(菅原)

でもある。言い換えれば、日本語教師の実践的知識、能力及び教育理念は「態度の変更」(岡崎)にほかならないのである。このような教師の役割は、日本語教育が成功するかしないかに直接に関わっている。

西華大は、2013年、日本語科大学院の設立を目指している。これを受け、教育、言語、文化などに精通した大学院教育を担うことのできる日本語教員を育成することが求められている。したがって、日本語教師の研修、ワークショップなど学術交流を通して、日本語教員の質はもとより日本語教育の質及び学術研究のレベルを一層高め、日本語教育の教授力の向上を図り、教材開発等に従事できる人材が必要となっている。

終わりに

言語教育は学習者の伝達能力の養成を目指し、教授法、教材、教育活動等の領域の変革が求められている。今後、西華大の学生のニーズを考慮した文化や社会などを紹介するデジタル教材開発などの副教材開発を行い、会話、聴解、文化紹介など現状の課題を解決していきたい。また、教員研修を通して、教員の意識の変化、日本語力の向上、教授力の改善などに著しい成果があがることを体験したが、このような教員研修を西華大で実施していきたいと考える。

注1)「1-2-1」とは、中国の大学で1年次と4年次、アメリカの大学では2年次と3年次の教育を行い、両大学から学位を授与することのできるという制度である。

(中国・西華大学外国語学院 講師)
(山口大学国際センター受託研究員)
(平成17年8月～19年7月)

資料 表 2 專門日本語教育
第一學年

科目名稱	上			下		
	教 材	必 / 選	時間數 (時間)	教 材	必 / 選	時間數 (時間)
精讀	新編日本語(一) 周平等編 上海外語教育出版社1994	必	120	新編日本語(二) 周平等編 上海外語教育出版社1994	必	96
聽解	日語听力初級教程 天津南開大學出版社1999	必	24	日語听力初級教程 天津南開大學出版社1999	必	24
會話				輕松日語會話 華東師範大學出版社	必	24

第二學年

科目名稱	上			下		
	教 材	必 / 選	時間數 (時間)	教 材	必 / 選	時間數 (時間)
精讀	新編日本語(三) 周平等編 上海外語教育出版社1994	必	96	新編日本語(四) 周平等編 上海外語教育出版社1994	必	72
閱讀	日語听力(一) 華東師範大學出版社1999	必	48	日語听力(二) 華東師範大學出版社1999	必	48
會話	みんなの日本語 I (日) 3A 公司 外語教研出版社2003	必	48	みんなの日本語 II (日) 3A 公司 外語教研出版社2003	必	48
閱讀	日語閱讀(一)(二) 外語教育研究出版社2002	必	48	日語閱讀(三)(四) 外語教育研究出版社2002	必	48
日本語文法	新編日語語法教程 皮細庚編 上海外語教育出版社1998	必	24	新編日語語法教程 皮細庚編 上海外語教育出版社1998	必	24
作文指導	大學日語寫作 陳俊森編 華中理工大學出版2003 大學日語寫作教程 蛭原正子, 苑崇利編 外語教學與研究出版社2006	必	30	大學日語寫作 陳俊森編 華中理工大學出版2003 大學日語寫作教程 蛭原正子, 苑崇利編 外語教學與研究出版社2006	必	30
日本事情	日本國家概況 劉笑明編著 天津南開大學出版社2000	必	24			
英語	大學英語綜合教程 上海外語教育出版社2002	必	48	大學英語綜合教程 上海外語教育出版社2002	必	48

第三学年

科目名称	上			下		
	教材	必 / 選	時間数 (時間)	教材	必 / 選	時間数 (時間)
精読	新編日本語(五) 陳生保等編著 上海外語教育出版社1987	必	72	新編日本語(六) 陳生保等編著 上海外語教育出版社1987	必	72
聴解	日本語听力(三) 華東師範大学出版社2000	必	24	日本語听力(四) 華東師範大学出版社2000	必	24
会話	現代日語中級会話 張基温編著 外語教学与研究出版社1995	必	48	現代日語中級会話 張基温編著 外語教学与研究出版社1995	必	48
翻訳・通訳				日漢互訳教程 高宁主編 南開大学出版社1994 日漢翻訳技巧 朱蒲清編著 武漢大学出版社1998	必	24
英語	大学英语綜合教程 上海外語教育出版社2002	必	48			
国際貿易 実務				国際貿易理論与実務 王明明主編 機械工業出版社2003 注：経済学部の教師が担当する。	必	24
ビジネス 日本語				新編商務日語綜合教程 羅萃萃、阿部成主編 東南大学出版社2004	必	24
日本近代 文学鑑賞				日本近代文学選読 北京第二外国語学院日語 教研室編 上海訳文出版社1987	必	24

第四学年

科目名称	上			下		
	教材	必 / 選	時間数 (時間)	教材	必 / 選	時間数 (時間)
精読	新編日本語(七) 陳生保等編著 上海外語教育出版社1987	必	48	新編日本語(八) 陳生保等編著 上海外語教育出版社1987	必	48

論文指導	新編日語写作 王軍彦編著 上海外語教育出版社1994	必	24			
翻訳・通訳	日漢互訳教程 高宁主編 南開大学出版社1994 日漢翻訳技巧 朱蒲清編著 武漢大学出版社1998	必	24	日漢互訳教程 高宁主編 南開大学出版社1994 日漢翻訳技巧 朱蒲清編著 武漢大学出版社1998	必	24
日本近代文学鑑賞	日本近代文学選読 北京第二外国語学院日語教研室編 上海訳文出版社1987	必	24			
ビジネス日本語	新商務日語総合教程 羅萃萃・阿部成主編 東南大学出版社2004	必	24	新編商務日語総合教程 羅萃萃・阿部成主編 東南大学出版2004	必	24
日本文化				日本文化 王勇編著 北京高等教育出版社1999	選	24
日本文学史	日本文学史 浜川勝彦編 日本奈良女子大学出版社 1992 日本文学 劉利国編 北京大学出版社1996	選	24			
日本企業文化				自主教材	必	24

表3 外国語としての日本語教育の教材

類 別		教 材
学部生向第一外国語		中日交流標準日本語（初級上下） 人民教育出版社，日本光村図書出版株式会社合作編写 北京人民教育出版社1988
英語専攻向第二外国語	学部生	中日交流標準日本語（初級上下） 人民教育出版社，日本光村図書出版株式会社合作編写 北京人民教育出版社1988
	大学院生	北中日交流標準日本語（中級上下） 人民教育出版社，日本光村図書出版株式会社合作編写 北京人民教育出版社1988

表3 外国語としての日本語教育の教材

類 別	時間数（時間）								合計時間数	備 考
	第一学年		第二学年		第三学年		第四学年			
	上	下	上	下	上	下	上	下		
学部生向第一外国語	48	48	48	48					192	週2回（4コマ） 45分1コマ
英語専攻 向第二外 国語	学部生				48	48	48	48	192	
	大学院生		48	48					96	

注：空欄は未開講。

【参考文献】

- (1) 岡崎敏雄・岡崎眸「日本語教育におけるコミュニケーション・アプローチ」凡人社，pp.3, pp.170, 2002
- (2) 菅原永一訳「第2言語習得の理論と実践」松柏社，pp.9, 1997
- (3) 友紀子訳「言語学習ストラテジー」凡人社，2001
- (4) 縫部義憲監修・水町伊佐男編集「講座・日本語教育学第4巻 言語学習の支援」スリーエーネットワーク，前書きviii，2005
- (5) 縫部義憲監修・水町伊佐男編集「講座・日本語教育学第1巻 文化の理解と言語教育」スリーエーネットワーク，pp.53, 2005
- (6) 第57回国連総会（2002年）
<http://mn.mekt.go.jp>
- (7) 高校日語專業四級考試制定小組編「高校日語專業四級考試大綱 修訂版」上海外語教育出版社，2005
- (8) 高校日語專業八級考試制定小組編「高校日語專業八級考試大綱」上海外語教育出版社，2003
- (9) 「大学日語四級大綱及樣題」上海外語教育出版社，2004